大会シンポジウム
「カント生誕 300 年」

提題者
城戸　淳　（東北大学）
宮村　悠介（大正大学）
小田部胤久（放送大学）
司会者
石田　京子（慶應義塾大学）
御子柴善之（早稲田大学）

趣意文

2024 年はイマヌエル・カント生誕 300 年にあたる。国内外で数多くの記念行事が開催されているが、本シンポジウムも同様の趣旨で実施されるものである。

長きにわたってカント哲学の存在は哲学の枠組内部だけでなく、社会的にも大きな影響を与えてきた。自他の人格をたんなる手段として扱ってはならないという尊厳概念や、永遠平和とそれを実現するための国際的な国家共同体の構想などは、カントが論じたそのままの形態ではないとはいえ、彼の理念が多くの社会のなかで妥当性を認められるようになった最たる例と言えよう。また、カント哲学は、彼以後の哲学者たちにとって、つねに参照点でありつづけてきた。ただし、カントはきわめて幅広い領域で業績を残してきた哲学者であり、その哲学が何であるかを一言で端的に言い表すようなフレーズを思いつくのは難しい。カント研究者としても「カントにおける〇〇とはなにか」を論じることがほとんで、「カント哲学とはなにか」を語る機会はめったにない。日々の研究において後景に退いている後者の問いに、本シンポジウムでは光をあててみたい。

カントの哲学は大まかには「批判」と「形而上学」のパートに分けられる。カントの哲学が従来の哲学と区別されるのは、そしてその後の哲学に大きな影響をもたらしたのは、主に「批判」という営みゆえにと言っても過言ではないであろう。カントにおいて「批判」は「哲学（＝形而上学）」そのものではなく、その「予備学」に位置づけられる。つまり奇妙に聞こえるかもしれないが、準備作業こそがカントが哲学に対して果たした最も偉大な貢献だということになる。

それでは批判とは何を批判するのか。それはよく知られているように、人間の認識能力であり、とくに人間の理性であった。『純粋理性批判』や『道徳の形而上学への基礎づけ』といった著作の最初に理性に対するペシミズムにカントが言及するのは偶然のことではない。これらの著作では、理性こそ絶対的真理を指し示すものとされた時代に別れを告げ、人間の保持する能力の吟味を介してでなければ確実な知識は何一つ成立しないということが宣言されるのである。ある人が真や善、美とみなすものは、他の人にとってもかならずしもそうであるわけではない。個々の人間は多種多様なあり方や見方をしていて理性の示す理想像からは程遠いといったところで、カントはあえて理性とその使用をつうじた普遍的な知への成立可能性を目指して、哲学的探究に乗り出したのではないだろうか。普遍的なもの、理性的なもののとらえ難さに直面しつつ、それをあえて言語化する方法を確立しようとする彼の態度が、カント哲学への関心が今なお衰えないことへの理由の一つであろう。

本シンポジウムでは、哲学史におけるカントの位置づけや、現代哲学におけるカントの影響といったことにはそれほど立ち入らず、カントの「三批判書」（『純粋理性批判』・『実践理性批判』・『判断力批判』）に合わせて、理論哲学・実践哲学・美学の専門家を招へいし、各々の立場と問題意識にもとづいて「カント哲学とはなにか」ということを論じてもらうこととした。

第一提題では、カントの理論哲学についての考察を重ねてきた城戸淳氏が、『純粋理性批判』の役割に従来の形而上学の破壊があることに注目し、その役割がどう遂行されているかを示すため、「弁証論」のアンチノミー章における「懐疑的方法」を取り上げる。アンチノミー章において懐疑的方法を用いて遂行されるのは、哲学上の教義（たとえば魂の不死や世界の有限性など）をめぐる抗争をつうじて二つの相対立する立場のうちに誤解の点を発見することによって、知の確実性をめざすという営みである。城戸氏によれば、懐疑的方法が『純粋理性批判』で形而上学を破壊する否定的過程として重要とされるのは、それが既存の権威に依拠せずに遂行されるからである。理性は相対立する立場に立つ諸教義を、相互に破壊しあう抗争へと陥らせる。このような「懐疑的方法」は、複数の人格間におけるコミュニケーションの場面において、相異なる立場の調停という含意をもつ。ここに普遍的人間理性への自己信頼を見て取ることができる。

第二提題では、カントの特に実践哲学を中心に研究を進めてきた宮村悠介氏が、「人倫の形而上学」というカントの構想を取り上げる。『人倫の形而上学』の出版は、カントにとって 30 年ほどにおよぶ課題であり、その課題と取り組むなかで、『純粋理性批判』や『人倫の形而上学の基礎づけ』、『実践理性批判』といったいわゆる「批判期」の作品も生まれている。宮村氏の提題は、この 30 年にわたる『人倫の形而上学』の出版構想のプロセス、言うなれば道としての「人倫の形而上学」と、実際に刊行された、作品としての『人倫の形而上学』の両者を概観し、そのことによって、晩年の作品『人倫の形而上学』の観点から、カントの哲学者としての生涯の全体像を示そうとこころみるものである。さらに提題の締めくくりとして、現代倫理学の観点から見た「人倫の形而上学」の可能性と限界（とりわけカント倫理学において「人間と人間の関係」に焦点があてられること）についての考察がなされる予定である。

第三提題では、カントの美学の専門家である小田部胤久氏が、『判断力批判』という著作がカント哲学のなかでどのような独自性を有しているかについて論じる。小田部氏によれば、『判断力批判』のうちには、内から限界を拡張する理論的営みを読み取ることができる。つまり、『純粋理性批判』のように、認識の可能性にかんする限界の内と外とを区分する営み（あるいは、いわば限界の外に立って、境界線を引く営み）としてでもなければ、あるいは『実践理性批判』のようにその限界の外へと超え出る営みとしてでもなく、限界の内にあって内から限界へと迫り限界を拡張する営みとして、『判断力批判』（特に第一部）の理論のいくつかを解読することができる。このような営みを射程に入れて美や芸術についてのカントの見解を読み解くと、その独自性と魅力を発見することができるというのが、提題の趣旨である。

以上の三つの提題をつうじて、カント研究者が現代においてなおカント哲学のどこに意義を見いだしているのかを示すことによって、他の分野の研究者とともにその可能性や限界を考える場を本シンポジウムが提供することができれば幸いである。

『純粋理性批判』における「懐疑的方法」について

城戸 淳（東北大学）

カントの批判哲学が成し遂げたことは、人間の理性が伝統的な権威や既成事実に寄りかからずにみずから知識や道徳を構築する手続きをあきらかにし、そこに信頼を寄せてよいとひとびとを励ますことだった。このような理性の自己構築性をおもく見るカントの読み方が広まりつつあることは、『理性の自己維持』（クレンメ）、『自己構成』（コースガード）、『権威の構築』（オニール）といった近年のカント書の表題のいくつかを眺めるだけでうかがい知ることができよう。

とりわけオニールは、カントが理性の正当化の手続きを政治のメタファーで語るという点に着目する。オニールは『純粋理性批判』の「方法論」の「訓練」章を読みときながら、理性の権威は、集合的なコミュニケーションにおける自由な相互批判によって政治的に構成されることを示している（オノラ・オニール『理性の構成――カント実践哲学の探究』加藤泰史監訳、法政大学出版局、2020年、第1章）。こうした読み筋には、アーレントのいうカントの政治哲学や、ハーバーマス式の討議倫理学、ロールズのカント的構成主義など、いくつかの残響を聴きとることができるだろう。ともあれ、このような理性の政治学は、これまでしばしば見過ごされてきたが、現代にあってますます重要性をもつカント哲学の一側面であるように思われる。

しかし本発表では、『純粋理性批判』における理性の肯定的な自己構築の過程には立ち入らず、むしろその手前にある否定的な一段階に光をあてたい。伝統的な権威が信頼されているところでは、あらたな理性の構築は始まらない。家を建てるには、そのまえに既存の建造物を取り壊し、更地に戻さなければならないだろう。『純粋理性批判』においてこのような形而上学の取り壊しの作業を担うのは、超越論的弁証論である。初版で四百頁を超える超越論的弁証論には、さまざまな魅力的な論点が含まれているが（拙著『理性の深淵――カント超越論的弁証論の研究』知泉書館、2014年）、ここではアンチノミー章における「懐疑的方法（skeptische Methode）」にしぼって解明を試みることにしたい。

「懐疑的方法」とは、「諸主張の抗争を傍観し、あるいはむしろ抗争を誘発しもする」ことで、「抗争になっている対象がむしろたんなる幻影にすぎず、それを双方がむなしく追い求めている」ということを突きとめる手続きである（A423f./B451f.）。

懐疑的方法の輪郭を見定めるためにまず留意すべきは、懐疑的方法は「懐疑論（Skeptizismus）」そのものとは区別されるということである。遺稿や講義録には、古代ギリシア以来の懐疑論についてのカントの慎重な検討の痕跡が残されており、この区別はそうした努力の結実と見てよい。アンチノミー章によれば、懐疑論とは、あらゆる認識の信頼性を掘り崩すことによる「無知」の原則である。それに対して懐疑的方法は、抗争をつうじて双方の「誤解の点を発見する」ことで、むしろ「確実性をめざす」（ibid.）。この点で懐疑的方法は、デカルトのいわゆる「方法的懐疑」と似ている。どちらも、懐疑の試練を潜りぬけることで、学問の確実性へ到ろうとする方法だからである。とはいえ、つまるところ神の善性をもちだすデカトルトとは異なり、カントの方法はどこまでも抗争のなかで「理性の主張をたがいに合致させるという試みにだけ試金石を認める」のである（A425/B453）。

さらに精密に見なければならないのは、懐疑的方法と、「訓練」章における「純粋理性の論争的（polemisch）使用」との異同である。論争的使用とは、「純粋理性の諸命題を、その独断的な否定に対して、擁護すること」である（A739/B767）。これは、命題とその否定との抗争を傍観するという点では懐疑的方法と等しい。しかし論争的使用は理性の「関心」を味方につけて、命題を一方的に擁護することで終わるので、「確実性をめざす」懐疑的方法よりも短い射程をもつ。論争において「中立性の原則」をとる「純粋理性の懐疑的な使用」（A756/B784）も、学的な確実性の手前で満足するかぎり同様である。ただし、論争的使用における「懐疑的な手続き（Verfahren）」（A769/B797）は、おおよそ懐疑的方法と重なるものであろう。

さて、懐疑的方法はアンチノミー論（宇宙論）において導入されるが、それは誤謬推理論（心理学）や理想論（神学）にも適用されうるのだろうか。たしかにひとまずは、心理学や神学においてはもっぱら一面的に仮象がうまれるので（cf. A406/B433）、理性の自己抗争にいたらず、懐疑的方法が役に立たないといってよい。しかしここで解釈の試みとして、方法論における「純粋理性の論争的使用」のほうから逆算してみると、懐疑的方法を、むしろ心理学や神学にも妥当する、弁証論の一般的な方法として鍛えあげることができるように思われる。理性を無制約者の領域へと招きいれて、その誇張的な舞台において醒めた反省へと誘うのが、懐疑的方法の真骨頂であろう。

懐疑的方法が『純粋理性批判』の否定的過程として重要なのは、それが既存の権威に依拠せずに遂行されるからである。伝統的な形而上学をハンマーで破壊しようとするならば、そのハンマーがもつはずの形而上学的な権威があらかじめ信用されていなければならない。破壊の作業はその権威を見逃さざるをえないし、その権威の残骸はつづく建築の作業にも妨げになるだろう。懐疑的方法において理性は、外からハンマーを借りてくることなく、内側から抗争をつくりだす。すなわち、理性はみずからの内なる独断論と経験論の原理を唆して、相互に破壊しあう抗争へと陥らせて、それを傍観するのである。懐疑的方法は、理性の純粋な自己破壊（いわば理性の内破）の方法である。

懐疑的方法にはひとつの政治的な前提がある。すなわち、対立する二つの立場は等しく重要であり、同じ発言権をもつものとして取り扱われなければならない、という前提である。これは懐疑的方法が理性の内なる諸原理の抗争を内観することであるかぎりでは、自明のことのようにも思われよう。しかしひとたび実際の複数的なコミュニケーションの場面におりてくると、その含意は重要である。ひとびとは各人の素質や関心に応じてある形而上学的立場をとり、ほかの立場をとる論者との討論になる。それが理性の真摯な自己抗争になりうるのは、異なる立場は人間理性に含まれる諸要素を各人が誇張的に代表することで成り立っていると考えるかぎりでのことであろう。懐疑的方法はその意味で、普遍的人間理性への自己信頼を表明するものである。この信頼は理性の肯定的な構成の場面にも等しくあてはまる前提であって、『純粋理性批判』はその破壊と構成の全過程をつうじてこの前提に立ち、その成果によって前提を正当化するのである。

カントの「人倫の形而上学」

――道であって、作品でもある(Wege-auch Werke)――

宮村悠介(大正大学)

『人倫の形而上学』は、一七九七年に出版された、カントの晩年の著作である。一般の哲学史においては、カントの著作のなかでも、『純粋理性批判』や『判断力批判』などの作品に比べて、かなり地味な存在であるだろう。しかし、一般にはあまり注意されていないかもいしれないが、『人倫の形而上学』という著作を出版しようとするカントの構想は、『純粋理性批判』のそれよりも古く、一七六八年にまで遡る。その後、実際の『人倫の形而上学』の出版までの約三十年のあいだ、カントはくりかえし『人倫の形而上学』を出版するという意向を表明しつづけており、カントが『人倫の形而上学』の出版を断念したことは、おそらく一度もない。『人倫の形而上学』の出版は、カントの四十代半ばから七十代の三十年ほどにおよぶ、長くて大きな課題であった。そしてその課題と取り組むなかで、『純粋理性批判』や『人倫の形而上学の基礎づけ』や『実践理性批判』といった、今日においてカント哲学を代表するとされている作品も生まれたのである。

本提題は、この三十年にわたる『人倫の形而上学』の構想のプロセス、言うなれば道としての「人倫の形而上学」と、実際に刊行された、作品としての『人倫の形而上学』の両者を概観する。そしてそのことで、カントの三十年にもおよぶ「人倫の形而上学」という課題との取り組み、および晩年の作品『人倫の形而上学』の観点から見た、カントの哲学者としての生涯の全体像を示そうとこころみるものである。

まず道としての「人倫の形而上学」については、『純粋理性批判』の構想との関係を明らかにする(一)。すでに述べたように『人倫の形而上学』の出版の構想は一七六〇年代に遡るが、一七六〇年代のカントの著作や論文において倫理学の問題を論じている箇所はすくなく、この時期にカントが『人倫の形而上学』をどのような作品として出版しようとしていたのかを知るための手がかりは乏しい。ただ注目に値するのは、一七七〇年の教授就任論文「可感界と可想界の形式と原理について」を経た、一七七〇年代前半において、『純粋理性批判』およびその原型となった作品の構想を書簡で語るさい、カントがしばしばその一部、あるいはそれにつづく作品として、道徳学や『人倫の形而上学』を論じる見込みを語っていることである。一七七〇年代のいわゆる「沈黙の十年」にあっても、『純粋理性批判』と『人倫の形而上学』はカントの構想において密接な関係にあった。またこの時期の道徳哲学の講義録からは、作品としての『人倫の形而上学』のもっとも基礎的な区分である、「法論」と「倫理学(=徳論)」の区別も、「強制にもとづいて(aus Zwang)」と「義務にもとづいて(aus Pflicht)」というかたちで、すでに準備されつつあることが確認できる。そして一七八一年に実際に出版された『純粋理性批判』においてカントは、批判につづく自分の「形而上学」の体系の片方として、「人倫の形而上学」を挙げる。カントは『純粋理性批判』では当面の論題ではないとして、その「人倫の形而上学」の構成や内容についてくわしく語ってはいないが、それでも「人倫の形而上学」は批判とともに、『純粋理性批判』執筆時のカントにとっての、真正な意味での哲学(=知恵への愛、フィロソフィア)の一部をなしている。本提題ではこうした『純粋理性批判』および理性批判という課題と「人倫の形而上学」の密接な連関をまずは確認しておきたい。

つづいて道としての「人倫の形而上学」について、一七九〇年の『判断力批判』以後に残された問題を取りあげる(二)。カントは一七八〇年代にも『人倫の形而上学』の出版を、『純粋理性批判』につづく、その次の課題として意識しつづけた。しかし一七八一年の『純粋理性批判』の出版ののち、一七八〇年代の中頃には「人倫の形而上学」の基礎部分を『人倫の形而上学の基礎づけ』としてあらかじめ提示することが優先され、終盤には独立した著作としての構想が新たに生じた『実践理性批判』および『判断力批判』という批判書の出版に没頭することになり、一七八〇年代には『人倫の形而上学』は出版されることがなかった。しかし一七九〇年の『判断力批判』とともに理性批判という課題を「卒業」してもなお、『人倫の形而上学』はなかなか出版されないままであった。『判断力批判』以降において、なにが『人倫の形而上学』の出版を妨げたのか。一七九七年に刊行された作品としての『人倫の形而上学』から逆算するかたちで、遺稿や講義録や準備草稿といった各種資料をもとに、道としての「人倫の形而上学」の最終段階において、カントの前に立ちはだかった哲学上の難問とはどのようなものであったのかを考えたい。

本提題の後半では作品としての『人倫の形而上学』を考察する。まずそもそもカントが構想しつづけた「人倫の形而上学」とはどのような学であるのか、作品としての『人倫の形而上学』をもとに考えたい(三)。カントは『人倫の形而上学』の各所において、『人倫の形而上学』の議論の対象から人間と物件の関係や、人間と神との関係を排除しており、「人倫の形而上学」とは、端的に言えば、「人間と人間の関係」についての学である。このことを、作品としての『人倫の形而上学』をもとに明らかにしたい。

そして最後に、こうした脱神学化された「人間と人間の関係」についての学としての「人倫の形而上学」の理念の、現代倫理学の観点から見た限界と可能性を考察したい(四)。近年、動物倫理学や環境倫理学といった、人間以外の生物(さらには岩石や惑星までも)を倫理的配慮の対象としてふくむ、倫理学の分野が盛んになっている。こうした新たな倫理学の動向の観点から見ると、「人間と人間の関係」についての学としての「人倫の形而上学」の理念には、近代倫理学に特有の限界があるようにも考えられる。人間以外の生物も倫理的配慮の対象とする、今日の倫理学の状況から見て、カントの「人倫の形而上学」のどこに限界があり、またどこに今日的な可能性があるのか。こうした問題を、作品としての『人倫の形而上学』での実際の人間以外の動物についての論述を参照しつつ、あらためて考えたい。

近代においては「人間と人間の関係」だけを論じればよかった倫理学が、今日では人間以外の生物をも倫理的配慮の対象とする方向で拡張しつつあるのは、おそらく否定しがたい歴史的な事実であり、それはカントが誕生した三〇〇年前からの、人類の倫理学および倫理的意識の進歩であると思われる。そうした現代にあって、カントの「人倫の形而上学」はどのような意義を持ちうるのか。そうしたことを考察することで、カントの「人倫の形而上学」の今日的意義を明らかにしたい。

内から限界を拡張する

カント『判断力批判』の地平

小田部胤久（放送大学）

『純粋理性批判』（1781/87 年）は、「経験とあらゆる現象の限界」を確定し、「この限界を超えて進むようにわれわれを駆り立てる」もの（すなわち「無条件的なもの」）がわれわれの認識対象とはなりえないことを明らかにする(B XX)。これに対して、『実践理性批判』（1788 年）は、こうした限界を端的に超えた「自由」を実践的な観点から主題とする(V, 3)。それでは『判断力批判』（1790 年）とはいかなる書物なのか。『判断力批判』「序文」によれば、『判断力批判』の目論見は第一の批判の扱う「自然」から第二の批判の扱う「自由」への「移行」を扱うことにある(V, 179)。これに対して本発表では『判断力批判』のうちに、内から限界を拡張する理論的営みを読み取りたい。詳述するならば、限界の内と外とを区分する営み（あるいは、いわば限界の外に立って、境界線を引く営み）としてでもなければ、あるいは限界の外へと超え出る営みとしてでもなく、限界の内にあって内から限界へと迫り限界を拡張する営みとして、『判断力批判』（特に第一部）の理論のいくつかを解読することが、本発表の狙いである。

内から限界へと迫り限界を拡張するという試みが最も明白に読み取れるのは、「崇高なもの」、とりわけ「数学的に崇高なもの」を論じた箇所であろう（§§ 25–27）。「崇高なもの」とは、「端的に大きいもの」であり、したがって「数学的に崇高なもの」とは端的に大きな量のことである(V, 248)。カントは以下のように議論を進める。「量評価」は、もしもそれが算術的に数の記号をとおしてなされる場合には、最大値にいたることがない。数の系列は無限に進みうるからである。ところが、量評価は、もしもそれが直観的になされる場合、最大値にいたる。それは一体なぜか。直観的にある量を捉えるには、「構想力(Einbildungskraft)」（カントはそれを「直観の能力」と規定する）の二重の作用が、すなわち「把捉(Auffassung, apprehensio)」と「〔感性的〕総括(Zusammenfassung, comprehension aesthetica)」が必要である。第一の把捉（眼前の個々の部分を捉えること）に関して、構想力は無限に進みうるが、これに対して第二の総括（捉えられた諸部分から一つのまとまりあるゲシュタルトを作り上げること）は、把捉が継続的に進むにつれて次第に困難となり、ついに「最大値」にいたる(§ 26, V, 251–252)。さて、カントによれば、崇高なものとは、構想力による感性的総括を不可能とするほど大きいために、構想力に対してその「最大値を拡張」(§ 26, V, 252)するように迫り、「構想力を〔内から〕その限界にまで緊張させるような対象」(V, 268)であり、崇高なものと出会う構想力は「われわれの理性の能力において制限されていないもの（すなわち絶対的全体の理念）に適合するように拡張される」(§ 27, V, 259–260)。崇高論の基本的な論調は構想力から悟性への「移行」であるが、しかし、この移行は構想力が自らの限界を内から拡張することによって可能となる。

次に、「美しいもの」をめぐるカントの議論に着目しよう。カントによれば、ある美しい対象と出会うとき、構想力は「対象を概念に先立って把捉する」(V, 192, cf. § 37, V, 289)。「美しい」という形容詞は、ある対象を客観的に規定する述語ではない、ということである。しかし、美しい対象、あるいは、それを捉える「構想力の表象」（直観的イメージ）は概念に対して働きかけることができる。このような構想力の表象を、カントは「ästhetisch な理念」と呼ぶ（ここでは、『判断力批判』における ästhetisch の語義には立ち入らず、したがって、訳語を充てずにドイツ語で表記する）。カントは「ästhetisch な理念」を「理性理念の対応物（対となるもの）」と規定する。すなわち、「理性理念」が「いかなる直観（構想力の表象）も適合しえない概念」（たとえば「自由」や「神」）であるとすれば、それとはちょうど逆に、「ästhetisch な理念」とは「いかなる悟性概念も適合しえない構想力の表象」である(§ 49, V, 315)。わかりやすく換言するならば、「ästhetisch な理念」とは、いかに悟性概念を用いて規定しようとしても規定しえないほど豊かなイメージのことである。カントの例を用いるならば、目の前に美しいチューリップがあるとして、そのイメージは、私達がチューリップという悟性概念によってあらかじめ理解しているものとは異なり、それをはるかに超え出る。すなわち、「ästhetisch な理念」と呼ばれる「構想力の表象」は、「ある規定された概念のうちへと決して〔概念的に〕総括(zusammenfassen)しえないほどに多くのことを思考させるきっかけとなり、したがって概念それ自体を制限されざる仕方で ästhetisch に拡張する」(§ 49, V, 314–315)。先に見たように、崇高なものは、構想力による感性的総括を不可能とするほど大きいために、構想力に対してその「最大値を拡張」(§ 26, V, 252)するように迫り、「構想力を〔内から〕その限界にまで緊張させるような対象」(V, 268)であるが、これに対し、美しいものは、悟性による概念的総括を不可能とするほど豊かであるために、悟性概念を「拡張」(§ 49, V, 315)し、悟性を内からその限界へと駆り立てるような対象である。

最後に、カントの芸術論に眼を向けることにしよう。カントの芸術論は、ある意味において、きわめて古典的（ないし保守的）である。彼は、「技術〔＝芸術〕にはある限界が置かれており、技術〔＝芸術〕はこの限界をさらに超え出ていくことはできず、おそらく、この限界はとっくに達成されていて、もはや拡張しえない」(§ 47, V, 309)、と述べているが、おそらくカントは古代ローマの古典期において芸術はこの限界に到達したとみなしている。しかし、それにもかかわらず、限界を内から拡張しようとする営みは、カントの芸術論を貫いている。私が特に注目したいのは、天才（芸術を構成する能力の一つとしての天分のこと）の要件としてカントが「独創性」を挙げていることである。独創性とは模倣に対立し、したがって、芸術に対してその都度「新たな規則」を与える(§ 49, V, 318)。すなわち、独創性のゆえに芸術史は断続性を特徴とする。しかし、独創性は「独創的無意味」（独りよがり）に堕す可能性がある(§ 46, V, 308)。そうならないためには、芸術作品は「趣味」（審美的判定能力）の基準を満たす必要があるが、趣味判断は「理想的規範」としての「ある普遍的規則」を前提とする(§ 22, V, 239)。このことは、独創性（すなわち芸術の限界を内から拡張する能力）と趣味（すなわち芸術に一定の限界を設定する能力）とが一人の芸術家のうちで拮抗する、ということを意味する。こうした拮抗こそが、芸術をその他の技術から区別する特徴をなす。

『判断力批判』は、出版直後から現在にいたるまで、哲学者のみならず芸術家や芸術理論家をも魅了してきたが、その理由は「限界」をめぐるカントの思考ゆえであると思われる。